027
132
1

蓬萊出

027
132
1

東京帝國大學圖書之印

64511
84

三三一

柳義帖巻之六

冬十題

神送

吹よせし浪しぶきや神送　去来

ともし火もあの葉に霰や神送　呂揚

松風し餅の音あり神なくさ　吾仲

名残の夜清やここ秋気を神　支考

笹原の夕さきにさし神おくり　鶴丘

宮も夜ん草もしみ神送月　朱廸

秘蔵子の蛍ちるや神送り　程巳

時雨

近江路を詠む哀れの秋しぐれ　千那

鴫立つや月の時雨哉　李寸

瓢箪の中にとしまれ時雨哉　斜嶺

[illegible]　徐刀

[illegible]　敦賀　愚想

[illegible]　先清

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　呂風

[illegible]　吾仲

[illegible]　許亡

[illegible]　浪化

山風や竹篠へ通しの[illegible]　大州

十夜

白粥[illegible]十夜の[illegible]　正秀

[illegible]十夜の釜[illegible]　松白

お十夜の口[illegible]　[illegible]汁　蒙堂

法令講の[illegible]十夜　子亜

[illegible]の雪いまだあるに十夜[illegible]　温故

[illegible]　[illegible]　李国

麥蒔　　鼠彈

[illegible]　　拙庚

[illegible]　　正直

[illegible]　　為利

[illegible]　　吉仲

落葉

[illegible]　　北枝

[illegible]　　大[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　崔叔

[illegible]　　千夾（オハリ）

[illegible]　　十治（秋年）

[illegible]　　吉仲

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

水仙巻

水仙や誰のおもかし頼みべき　荊口

口切に紀の路もとし水仙花　此直

平日より菖借もあつい冬優花　支考

水仙も箱て越あつまるはの山　蒙埜

泉の手て立りまるや水仙花　木等

鉢敲

鉢たゝきむかし枕もとおやヒ子ト子　諷竹

水鳥の語るゝ其まゝ鉢たゝき　鉄中 少人

世の中は放しろかや鉢叩　オハリ 香水

瓢箪や宿もぬきて鉢叩　呂物

乾鮭を手にゝして見えり鉢敲　毛紈

鉢叩きゝゝに浮世の茶筅賣　支考

鴛鴦

雁の声をしまふあとゝめの鴛鴦飛ん　浪化

秋篠や滝きるものゝなし鴛鴦乃羽　支考

[illegible]　　後柳
[illegible]　　吾仲
[illegible]　　重之
[illegible]　　蓬子
[illegible]　　出青

雪

[illegible]　　嵐雪
[illegible]　　存古

[illegible]　　三ノ　歌十
[illegible]　　円　文川
[illegible]　　吾仲
[illegible]　　支考
[illegible]　　千皐
[illegible]　　イセ　万彩
[illegible]　　三ノ　星塵
[illegible]　　円　碧川

遊柳後園序

世に遊ふ人あまたにて詩歌管絃律に
楽しむ物あまたありて様々なりける
山海樹木にあそふ人の心もまたさまさまにて詩は
をよそ千しなにも分かちぬれはしけるなかなれ
この比は春さる花のさかりの頃遊びあそふ
むかしの詩人もいひつたへし詩は楽に近きの
何かしこの方にあそひて遊ぶ日もあらめ

類みは開の一字に花鳥のあたりなるに
楼よりし出つるよりはさらにみえて見えて
耕の時雨にみな花ひらけは月く大小諸顔
更にゝ佛寺もしけ日東郊摘もしけ中に
あそぶ人は酒の事も得しかたに
みなとも又酒情の人なり
罰は金谷の酒も知りて詩歌管絃
入まつ酒をこひまかせてもとのまゝ

さかんときさいふれける

月雪の粉や花にわすれられ　東雲坊

おりつかせよ面白き人　吉仲

躑躅を惜みはいかなる東漬え　文皇

見し出来て十年振る　是物

はくさやまち男乃決しけり　花字

餅つくきの宗派に夕出る　営埜

雪の朝ふ松のしたみ日和さし　子由

節あぐしよるの行か　坊

白結さいし親に垂ふる宗　仲

東ふもりしきにとゆゑふ筆　了

旅笠の向に晴なりよ捨て　物

夢乃り新文屋の静さ　字

花同の柳よ向ふ旧飛山　望

植木喧の嘆張路了ふ風　亜

秋もたゞ松しき鳩の空　坊
今さり雛子腰のよさ　仲
一夜入しくるないさ縫月　少
虫も啼しむ蛛も泣しまき　如
十
伽ふみ君十二一重乃着らく　字
梅も咲けなま手の葉か　双
さす絹ふ虫さく流さる星紙数　杢
草揺るなさく秋の小便　碕

口きやみ楊ふゐぬしみ喰ひの音　仲
風吹さいの茶多きの笹　菜
黄葉乃蛸千本燒ひ繪果らく　如
神明降のなうみ手紙もの　字
草枕も紅茶はとはうまんし　双
窗いまんとも稲の穂乃月　杢
世の種なか常陸の御よろせ吹て　坊
黒の尾細出入小鶏の戯　仲

雜乃面白とりわの世あるう　を

わなをを乃を　の　物

つを光の光　を　を

仰　の　を　の　の　仰

嘆　を　の　の　を　を

鎌の二月み　乾乃二月　秋葉

菊阿居士者ハ茶湯好まれしゆ
折柳のおのゝ里ハ云世ハ茶すゝ人を
風雅のこゝをゝうきて風情をさるゝ
さゝも古人ハ見あくとうはしく
ゝきゝ柳ゝきゝをゝ毎ゝハ面白の
遺ゝハ富士をかき業平ゝハ宇津の山

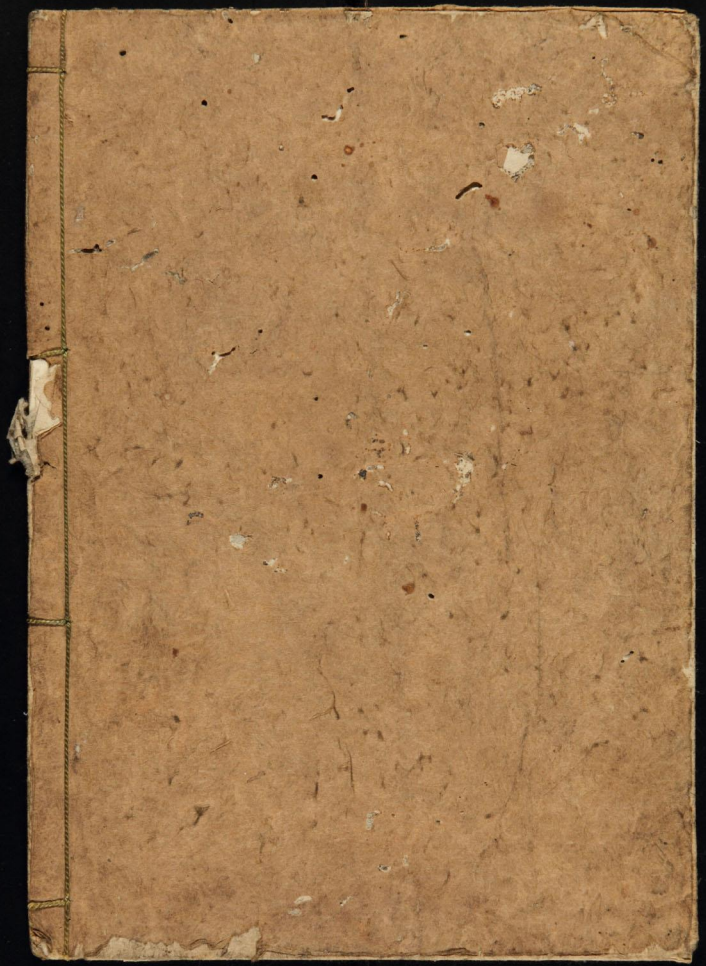
拾ゝ一らふ今日の茶湯ハ九はゝ
ゝ道人の著ゝ制ゝて侘庵ゝを
新ゝし新しき面行とハゝ吾家
ゝのゝゝのゝゝハゝ人物の賢つき
ゝ猿やつきの侍ゝ風雅も風情と
ゝ風雅も文ゝゝんや播田の
麦八匂湯ゝて人の心ゆゝ芋湯入ゝ

愛知女專
第 11577 號
圖書

邑千

源子卿和

〳〵国家の盛衰八ツを言る（一）あゝの後云と
の人物ハ其風俗風情和歌俳諧ハ天時
尚流の仰天ゆゑ〳〵選者渡氏君仲自筆

渡氏君仲

井筒屋善兵衛版